

優秀賞

テーマ…多様性を認め合う社会をめざして
「天然の白メッシュ」

茨城県・江戸川学園取手高等学校1年 中西 優奈

ある夏の日、私はタクシーに乗った。運転手が、助手席に座った私を見た。

「お前さん、その若さで白髪生やしてらんか」

「はい、そうなんです」

「なんか、メッシュみたいでええやん」

私は少しうれしくなった。メッシュといっても別に髪を白く染めたわけではない。これは、私にしかない、天然の白メッシュなのだ。

5歳のころ、首に不自然な白い斑点があると母に言われ、病院に行った。そこで告げられた病名は尋常性白斑。皮膚の色素がなくなり皮膚が白くなる病気だ。私の場合、右耳の上と下に白斑が生じた。特に耳の上の白斑はちょうど髪のある位置にあるため、そこだけ髪の色も白くなっている。心配した母が毎日軟膏剤を塗り続けてくれたおかげで、白斑は広がらずに済んだ。耳の下の白斑は手術で治すことが可能だったが、当時の私が怖いと言って拒否したために手術は行わなかった。

白斑そのもので生命に危険が及ぶことはないことや、他人にうつるような病気ではないことを、5歳の私は幼いなりに理解していた。だから、肌が白いことを怖がるようなことはなかった。だって、これが私だから。自分の白い肌と髪を気にするようになったのは、小学校に入ってからだった。なんで首のこが白いの？ なんで髪の色が抜けただけ白いの？ そう聞かれることが多くあった。病気で色が抜けちゃったんだ。でも、命に危険はないし皆にうつることもないよ。私はそれだけのことを知っていたから、聞かれたときにすぐ説明できた。だが、いくら危険ではない病気であっても、病気は病気だった。

「ゆうなちゃんにさわるよ、私も白くなっちゃうー」

病気はうつるものというイメージが強くてたまたま、「さわるよ白いのがうつる」「まっしる菌が手につく」と言われることがしばしばあった。幸い白斑の原因でいじめられることはなかったが、奇異の目で見られることは少なからずあった。悲しかった。白斑は他人にはうつらない病気だと知っていたからこそ、悲しかった。このころから、年に2回ほど美容院で髪を染めるようになった。

ある日、仲の良かった友達私の白髪に気づいた。案の定聞かれたから、病気で白くなったと返した。すると友達が言った。

「へえ、白い髪の毛、かっこいいね」

初めて言われた。肌や髪が白いの、周りの皆と違うから変だったはずだ。それなのに、かっこいいって、どういうことだろう。

その日から改めて意識するようになった。すると、首が白いのを変だ、病気だ、と言ってくる人が周りにほとんどいなくなっていたことに気づいた。それどころか、白い髪かっこいい、と言ってくれる人が増えていた。ちょっと変わった私を見た目を、皆が受け入れてくれた。そんな気がした。うれしかった。いつしか、美容院で髪を染めるのがもつたに思えてきた。

中学校に入学し、周囲の環境ががらりと変わった。新しい友達もたくさんできた。私の白い肌や髪に気づいても、だれも非難しなかった。それどころか、白髪かっこいいと言ってくれる人がたくさんいた。天然の白メッシュは、人と自分を隔てる壁ではなく、自分のチャームポイントの一つとなっていたのだ。

人は、自分と違う所のある人と会ったとき、つい拒絶してしまいがちである。だが、それで本当に楽しいだろうか。お互いを認め合い、多様性を受け入れてみると、社会はきつともっと明るくなるだろう。だから私は、多様性を大切にしている。かつて自分が受け入れられたときのように。多様性を認め合う社会が当たり前になる、そんな日を目指して。夏、髪を染めた。学校へ行った。友達から言われた。もつたにいい、と。ありのままの私でいい、と。うれしかった。だから、家に帰った私は、母に言った。

「私、次からは、髪染めないことにするね」